住居構造・形態と，居住者のパーソナリティとの関係

——特にYG検査，MASなどとの関連について*——

駒　崎　　勉

1. 研究の目的

われわれのパーソナリティは，生物的，生理的基礎をもつと同時に，他方それが文化的，社会的所産であることはいうまでもない。しかし，その両者の交錯の仕方や，影響する度合などとなると，これは容易には論じられぬむつかしい問題である。また，パーソナリティのディメンション（部分や次元）によっても，その様相は，さまざまな変化をすることであろう。

本研究では，社会的に形成されるパーソナリティのうちでも，比較的固定した変りにくい部分と，僅かな環境の変化によって適応しつつ変容する部分とについて，われわれの“住居の構造ないしは形態”といった従来あまり取りあげられることの少ない，ごく身近かな変数が，どう，かかわりをもっているか明らかにしようとするものである。

ところで，特定の地域には，特定のパーソナリティが生まれることは，古来からいわれてきたことである。わが国の「人国記」[注1] などにも，パーソナリティの風土性がはっきりと示されている。しかし，こうした風土性は，今日，経済，社会，教育などの水準の向上につれて風土性をつくる要因が画一化され，次第にその特徴を失っており，パーソナリティの地域差など，あまり論じられなくなっている。

ところが，最近，別な視点から新たな地域的差異が生まれようとしている。それは，パーソナリティの地域性をミクロ的に捉えた場合である。例えば，首都圏のごく狭小な地域，それも同一行政区域内で，物理的に隣接した地域であっても，新開地に忽然と造成された集合団地か，それとも在来の様々な形態や構造をもった住居が入り混った地域か，といった条件が，新たにパーソナリティの特性を生ずる要因として，関与するようになってきた。[文献1]

これを要するに，県民性などといった広域（面）の問題は次第に消失し，新たに居住の構造ないしは形態[注2]といった質的（点）な相違が，パーソナリティの社会的形成要因として大きく働いている，という仮説を提出するゆえんでもある。

---

* この研究は，その大半を本学非常勤講師岡村一成氏との共同で行ったものである。同氏が事実上の共同研究者であることを最初に記しておきたい。

さらに，居住構造や形態がパーソナリティの形成要因として働くことに先行して，すでに，われわれの住居選択の時点でパーソナリティの特性の差異が関与したのではないか，という疑いももたれる。つまり，なかば無意識的な動機として，パーソナリティの個性が，その住居を選ばせたという仮説である。

以上，二つの仮説について，これからさまざまな角度から検討を加えていきたい。

また，さらに加えて，本研究では居住性と精神衛生といった問題にもふれていきたい。本格的な集合住宅がわが国に誕生したのは，1950年（昭和25年）ごろのことである。1955年には日本住宅公団が発足，1980年秋，日本住宅公団だけで100万戸目の集団住宅をつくるに至った。これに民間のいわゆるマンションを加えれば，高層集団住宅は厖大な数にのぼる。ところが，当初は住民の住みやすやさ，機能性といった面だけが問題にとりあげられたが，最近になって，高層住宅の居住者が例えば不安や身体的変調を自覚しやすい，といった報告が散見されるようになった。そんな意味でも，ここで居住構造や形態と，居住者の不安などについて検討を加えることは，意義あることと思う。

ところで1958年（昭和33年），「週刊朝日」誌上で“団地族”という言葉が始めて使われ，新しい風土性をもった“種族”が誕生したことが，いわば社会的に認知された。それから20年余，団地特有のパーソナリティが問題になってきたことは，わが国の社会心理学の分野における一つの新しい局面が開かれた，といっても過言ではあるまい。

2. 研究の方法

すでに目的の項で述べたように，住居構造などとパーソナリティとの関係を明らかにするために，いくつかのパーソナリティ検査を用いたが，その被験者には主として20歳から39歳までの主婦を対象とした。その理由は，成人男子を被験者にすることは，i）有効回答数を著しく減少させる結果に終ることから，かえって結果をゆがめてしまう恐れがあること。ii）主婦のパーソナリティ特性は，かなり夫のパーソナリティと類似していること，[文献2] などによる。

次に本研究でとりあげたパーソナリティ特性ないし側面は，次の通りである。

i）パーソナリティの内面的構造から得られる，比較的固定した特性として，ＹＧ検査のうち，a．社会的向性，b．支配性，c．思考的向性，d．衝動性，e．一般活動性，f．攻撃性，g．非協調性，h．主観性の８特性。

ii）パーソナリティの比較的表層部分における行動レベルの特性としては，職務適応性検査[文献3]（以下適応性検査と略す）のアイテムから，家庭の主婦に適用しやすいように若干，表現をあらためたもの７特性。すなわち，a．公共性，b．礼節性，c．共感性，d．計画性，e．

創造性，f．達成性，g．機敏性の7特性である。

iii）情緒的側面としては，顕在性の不安を取りあげることにした。検査としては，スペンスの不安尺度（Spence, J. T.,: Manifest Anxiety Scale, 以下 MAS と略す）を用いた。

次に，研究上のテクニックを明らかにしておこう。それは大別して2つに分けることが出来る。i）まず，後述する様々な居住構造や形態の中に居住する主婦を対象に，上述の心理検査を実施し，その平均得点から，居住性の相違とパーソナリティ特性との関係を把握する。ii）次に，YGと適応性検査の因子分析を行い，そこから導き出されたパーソナリティの因子について，居住性との関係をつかみ，いわば表裏からの考察を行って，一層，調査結果の確証性を高める。また，MASについても同様に因子分析を行って，不安を構成する因子と住居構造などとの問題をとりあげ，たんに不安の高低を知るだけではなく，より分析的手法をとることにした。

さて，以上述べてきたごとく，本研究ではYGなどのパーソナリティ特性を用い，1）検査得点の比較と因子論的考察。2）情緒的側面として不安度の得点比較と，同じく因子論的考察を行い，いわば2種類の内容をもった研究から成っている。また両者とも調査の時期，被験者，調査地域なども若干異っている。そこで，この2種の研究を「研究I-A, B」と「II-A, B」に分けて結果と考察を行い，研究の具体的な手続き（procedure）なども，その中で述べることにする。

3. 〔研究I-A〕住居構造・形態とYGおよび適応性検査との関係[注3 文献4]

住居の構造，ないしは形態の相違が，そこに居住する人々のパーソナリティと，いかなる関係にあるかを明らかにすることが，この研究Iの直接の目的である。とくに，住居が高層か一戸建か，あるいは同種類の家屋の集合か（団地），それともさまざまな種類の家屋や職業が混在する形態なのか，などによって，その住居のパーソナリティ特性に差異を生じ，かつ，その差異は，居住後に形成された部分と，さらに住居選択の時点において，社会的，経済的，地理的要因と並んで意識されぬまま選択上の心理的要因が働いている，というのが本稿の仮説であった。これらの点を明らかにすべく，次のような手順で調査が行われた。

a．手続き

まず，YG検査の中から，すでに述べた8つの特性と，適応性検査から7つの特性を選び，129問の質問項目をとりあげた。整理の都合上，これに妥当性をみるアイテム1問を加えて，合計130問の質問紙を作成した。（Table 1 参照）この質問紙を，Table 2 に示した地域で，無作為に選んだ家庭の主婦を対象に配付，記入してもらった。調査に協力をしてもらえることを確認のうえ，質問紙を配付して後日回収したため，回収率は極めて高く，90～95%の高率を得た。

またフェイス・シートには，回答者の年齢，夫の年齢と職業，現住地への移住時期なども記入

(**Table 1**) 住居構造，形態とパーソナリティとの関係を把握するために用いた検査と，そのアイテム

ＹＧ検査から８特性，80アイテム*

1. 色々な人と知り合いになるのが楽しみである
はい　いいえ　？　（以下略）
2. 人中ではいつも後の方に引込んでいる
3. むずかしい問題を考えるのが好きである
4. 色々違う仕事がしてみたい
5. 周囲の人とうまく調子をあわせていく
6. いつも何かしていないと気がすまない
7. 世の中の人は人のことなどかまわないと思う
8. わけもなく喜んだり悲しんだりする
9. 知らぬ人と話すときはかたくなる
10. 会などの時は人の先に立って働く
11. 一人きりでいたいと思うことが時々ある
12. 計画を立てるよりも早く実行がしたい
13. 短い時間に沢山の仕事をする自信がある
14. 正しいと思うことは人にかまわず実行する
15. スパイのような人がたくさんいる
16. 心配でねむれぬことがたびたびある
17. こちらから進んで友達を作ることが少ない
18. 会やグループの為に働くのがたのしみである
19. 人のすることの裏を考えることが多い
20. じっとおとなしくしているのが苦手である
21. 人に対してはいつも気軽に返事ができる
22. 目上の人とも遠慮なく議論することがある
23. 親友でもほんとうに信用することはできない
24. いやな人と道で出合うと避けて通る
25. 人目に立つようなことは好まない
26. 自分で話すより，人の話をきく方である
27. 実行する前に考えなおしてみることが多い
28. いつも何か刺激を求める
29. 困ることがあっても，ほがらかでいられる
30. 衝動的である（自分がおさえられない）
31. 人がみていないと大ていの人は怠けると思う
32. とてもありそうもないことを空想する
33. 異性の友達はほとんどできない
34. 世話役はいつも人に頼むことにしている
35. 会話の最中にふと考えこむくせがある
36. よく考えずに行動してしまうことが多い
37. てきぱきと物事をかたずける
38. 失礼なことをされるとだまっていない
39. 人の親切には下心がありそうで不安である
40. 頭がよくなったり，悪くなったりきまらない
41. 人と広くつきあうのが好きである
42. 目上の人の前に出るとかたくなる
43. 何んでもよく考えてみないと気がすまない
44. 人といっしょにはしゃぐことが多い
45. 仕事は人よりずっと速い方である
46. 平凡に暮らすより何か変ったことがしたい
47. 人は結局，利欲のために働くのだと思う
48. たびたび，ねつかれないで困ることがある
49. 誰とでもよく話す
50. 引込みじあんである
51. 用心深いたちである
52. 口数が多い方である
53. いきいきしている
54. 気が短い
55. 不満が多い
56. 時々誰かに打ち明け話がしたい
57. 新しい友達はなかなかできない
58. 人のあつかいがうまい
59. たびたび考えこむくせがある
60. お祭りさわぎがすきである
61. 新しいことにもすぐなれる
62. 軽蔑されたと思うと，ひどく腹が立つ
63. たびたび人の気持を確めてみたい
64. 時々ポカンとしていることがある
65. 無口である
66. はにかみやである
67. のんきなたちである
68. 早合点の傾向がある
69. 大体いつも機嫌がよい
70. 色々な世間の活動がしてみたい
71. 自分はいつも運がわるい
72. 空想にふけるのが楽しみである
73. 人中に出てもまごつかない
74. 人前で話すのは気がひける
75. 深く物事を考える傾向がある
76. 気がるな，たちである
77. 動作がきびきびしている
78. 退屈な時は何か強い刺激を求める
79. 人は私を十分認めてくれない
80. 座っていても気分が落ちつかない

適応性検査から7特性，49アイテム** (130番は妥当性項目として追加***)

81. 紙くずなどを，つい路上にすてる
82. 誰にもていねいな態度で接する
83. 誰とでも，すぐうちとけて話せる
84. 新しいプランを考えるのが好きである
85. 一つの興味にとらわれやすい
86. 負けずぎらいだと，人から言われる
87. 動作がきびきびしている
88. みんなで使うものを粗末にすることがある
89. 人にあまりあいさつをしない
90. 話しやすい人だ，といわれる
91. 一夜づけですることが多い
92. いろいろな角度から考えるのが苦手である
93. 批判の側にまわることが多い
94. のろまなほうである
95. 整理整頓がわるくて人にめいわくをかける
96. 人のものを黙って使うことがある
97. 相手の立場に立てる
98. 頼まれたことは，決められた日までにしあげる
99. 家事をしながら，よいアイデアがうかぶ
100. 目標を立てて努力する
101. 物事を，てきぱきと処理する
102. 交通信号を無視することがある
103. 人に迷惑をかけても，あやまらないことがある
104. 人を怒らせることがある
105. 計画のために時間をかけない
106. できないと思うとやる気がしない
107. 万事そこそこ適当にやっている
108. 人におくれをとることが多い
109. 禁煙の場所で，喫煙する人を見ても気にならない
110. 目上の人にも特別のことばを使わない
111. 友だちをつくりにくい
112. 旅行などの前には，じゅうぶん計画を練るのが好きである
113. 自分にとって都合の悪いことは，あえて聞かない
114. 自分の仕事は，最後までやりとげる
115. 頭の回転が早い
116. 期日までに本を返さないことがある
117. いつも服装はきちんとしている
118. 近所の人が悩んでいると，ほっておけない
119. 何でも思いつきでする
120. 話し合いをしても自分の考えを変えない
121. 失敗すると意欲を失う
122. 仕事がていねいすぎる
123. 割りこんでくる人があると注意する
124. 目上の人にも特に気は使わない
125. 人のすることによく腹がたつ
126. 計画的な仕事は性にあわない
127. 知的好奇心が強い
128. 困まるとすぐ投げだす
129. 後手(ごて)，後手(ごて)にまわることが多い

130. 人のかげぐちをいったことは絶対にない

* ＹＧ検査は，８特性が次の順番で各アイテムと対応している。

社会的外向……1，9,17……
支配性……2,10,18……
思考的外向……3,11,19……
衝動性……4,12,20……
一般性動性……5,13,21……
攻撃性……6,14,22……
非協調性……7,15,23……
主観性……8,16,24……

** 適応性検査も同様に次に示したごとく対応している。

公共性……81,88……
礼節性……82.89……
共感性……83,90……
計画性……84,91……
創造性……85,92……
達成性……86,93……
機敏性……87,94……

*** (妥当性……130)

(Table 2) 調査対象地域と被験者一覧

地域	サンプル数	年齢別内訳				移住時期別内訳			居住構造・形態からみた調査地域の特徴
		20～29	30～39	40～49	その他・不詳	S47年以降	S37～46年	その他	
A川越市下広谷	168	24	134	10	−	128	36	4	一戸建て，新旧居住者の混在職業形態の多種多様
B坂戸市西坂戸	192	33	155	4	−	180	11	1	一戸建て，新開地の団地
C 〃 北坂戸	151	50	82	14	5	150	1	−	高層集合団地，一部分商店街と混在
D 〃 東坂戸	118	69	38	7	4	118	−	−	純高層集合団地，新開地
E 〃 若葉	49	33	11	1	3	48	1	−	Cに同じ
合計	678	209	420	36	13	624	49	5	

してもらい，無記名方式とした。調査実施の時期は1978年11月から1979年１月までの間である。

また，調査地域の特徴については，Table 2に示したように，大別すれば高層住居[注4]，（CDE地区）か一戸建て住居（A, B地区）か，という住居の構造別となるが，もう一つの次元，すなわち，ほぼ同種の家屋によってのみ構成されて一団地を形成する，集合住居（BCD地区）か，それとも，新旧さまざまな住民のいり混った，しかも職業的にも多種多様化した居住地か（A地区），といった類別が出来る。これらの点で，この調査で選んだ地域は，住宅地の典型的な種別をカバーしたといえる。しかも，何れの地域も行政的，物理的には接近しており，その点に関する限りでは，同一条件下に住まう被験者といってよい。

(Table 3) 住居構造・形態と住民のパーソナリティ特性との関係

パーソナリティ特性 ＼ 調査地域区別		B（一戸建団地）	C（高層混在）	E（高層混在）	A（一戸建混在）		D（純高層団地）		AD間の差
					M	SD	M	SD	
YG検査から8特性	1 社会的外向	9.93	10.10	10.54	9.94	4.98	11.52	4.81	**
	2 支配性	7.49	8.30	8.29	7.92	5.38	9.24	5.08	*
	3 思考的外向	11.02	11.36	13.00	11.53	4.27	11.49	4.69	
	4 衝動性	9.21	9.57	11.16	8.63	4.53	9.82	4.61	*
	5 一般活動性	11.92	11.96	11.35	11.67	4.74	12.37	4.69	*
	6 攻撃性	8.80	8.66	9.87	9.09	4.17	9.05	3.82	
	7 非協調性	6.25	6.25	6.70	6.23	4.51	6.08	4.12	
	8 主観性	6.34	6.11	6.43	5.63	3.77	6.14	3.80	
適応性検査から7特性	9 公共性	11.24	11.19	11.08	11.21	2.19	11.15	2.22	
	10 礼節性	11.93	11.84	11.27	11.41	2.42	11.35	2.45	
	11 共感性	9.57	9.46	9.16	9.07	3.35	9.73	3.21	?
	12 計画性	9.54	9.16	8.50	9.44	3.07	9.25	2.87	
	13 創造性	7.54	7.77	6.37	7.63	3.06	7.74	2.81	
	14 達成性	9.14	8.68	8.25	9.04	2.80	9.01	2.60	
	15 機敏性	7.92	7.79	8.22	8.08	4.14	8.66	3.75	

b．結果と考察

まず，全体的な結果は，Table 3 に示した通りである。15のパーソナリティ特性の平均得点を居住地区別に示したが，ＳＤについては典型的な地域と思われる A. D 両地区のデータについてのみ記し，他の地区は省略した。

一べつして分ることは，一戸建て混在住居地（A地区）と，一戸建て集団住居地域（B地区）は，おおむね近似したパーソナリティ特性を示し，高層混在地区（C, E地区）と純高層集団住居地域（D地区）の３群は，ほぼ共通した傾向を示している。そこで，Table 4 のＡ表に，Ａ＋Ｂ地区と，Ｃ＋Ｄ＋Ｅ地区のデータを合わせて比較してみた。一戸建群と高層群との間に，やや有意な差が認められたのは，ＹＧの 1, 2, 4 の特性で，高層群は一戸建群に比し，社会的に外向を示し，支配性が強く，衝動的であるといえる。一方，適応性検査の結果をみると，両者間にあまりにも差が認められないことに驚かされる。これは一つの意味があろう。この点については後述する。

いずれにせよ，パーソナリティの比較的基本的かつ固定的特性であるＹＧに差が出て，適応性検査に差が認められなかったことは，こうした差が居住地域の影響で俄かに形成されたものではなく，むしろ，自らの居住地を選択するさいに，すでにもっていたパーソナリティの特性が，何らかの形で関与した，と十分推測できよう。

また，換言すれば，物理的にも行政的にも極めて近似した地域内で，しかも経済的にも大きな

(Table 4)　移住時期・住民の年齢などとパーソナリティ特性との関係

パーソナリティ特性 ＼ 被験者の移住時期年齢等		〔A〕 A＋B（一戸建） M	〔A〕 A＋B（一戸建） SD	〔A〕 C＋D＋E（高層） M	〔A〕 C＋D＋E（高層） SD	〔A〕 AB・CDE間の差	〔B〕 A地域(一戸建)における新旧移住者の比較 S47年以降移住者	〔B〕 S37年～46年移住者	〔B〕 差	〔C〕 調査全域の年齢別比較 20~29歳	〔C〕 30~39歳	〔C〕 差
YG検査から8特性	1 社会的外向	9.93	5.00	10.70	5.12	*	10.32	8.82	*	10.79	10.14	
	2 支配性	7.71	5.12	8.65	4.93	*	8.29	6.88	*	8.46	7.95	
	3 思考的外向	11.26	4.34	11.66	4.45		11.59	11.40		11.43	11.60	
	4 衝動性	8.94	4.49	9.91	5.17	*	8.69	8.25		10.56	9.10	**
	5 一般活動性	11.81	4.91	12.02	4.94		11.74	11.40		12.05	11.91	
	6 攻撃性	8.94	4.22	8.99	4.05		9.02	9.00		9.49	8.90	
	7 非協調性	6.24	4.37	6.26	4.24		5.88	6.77		6.60	6.02	
	8 主観性	6.01	3.72	6.17	3.97		5.22	6.42	*	6.47	5.90	
適応性検査から7特性	9 公共性	11.25	2.31	11.16	2.29		11.35	10.85		10.97	11.32	
	10 礼節性	11.69	2.35	11.57	2.25		11.38	11.54		11.42	11.74	
	11 共感性	9.33	3.14	9.52	3.21		9.33	8.48	?	9.27	9.50	
	12 計画性	9.49	3.08	9.04	3.00		9.81	8.31	**	9.08	9.34	
	13 創造性	7.58	3.03	7.54	2.86		7.93	6.91	*	7.43	7.68	
	14 達成性	9.10	2.87	8.74	2.84		9.26	8.60		8.85	8.90	
	15 機敏性	8.00	4.07	8.18	3.89		8.22	7.37	?	8.51	7.93	
被験者数		N＝360		N＝312			N=127	N=35		N=207	N=418	

差のない狭小地域で，住居の構造・形態上の変数がこれだけのパーソナリティの特性に関与することは注目に値いしょう。

次に，A～E５群のうち，もっとも典型的な一戸建て混在地域のA地区と，純粋に高層集団住宅D地区に限定して，これを Table 3 の右側のデータで比較，考察してみよう。A地区は社会的向性の点で，D地区よりも著しく内向に傾き，５％水準以下で有意差が認められる。支配性，衝動性，一般活動性についても５～10％水準でA地区は低い値いを示した。これらを通してみると，高層群のパーソナリティは，ひとことでいって社会性に富み，活発で，人の優位に立ちたがる，といった積極的な人物像が浮かび上る。一方，一戸建群のとくに混在型，つまり非団地的な住民（主婦）は，平板で静的な人柄をうかがわせ，一種のパーソナリティの硬さ（rigid）や融通性のやや乏しいことを示唆している。また両群間に，思考的向性に何らの差もみられないことから，思考性といった特性が，極めて固定的な，環境の力ではほとんど変りがたい特性であることを暗に示しているように思えた。

また，適応性検査の得点結果には両者間に有意な差はない。しいていえば，？を付した共感性が高層群のほうに幾分まさる程度である。しかもＹＧの得点のＳＤに比較して，適応性検査のＳＤがかなり小さい。つまり結果に個人差が少ないことを意味し，居住の条件などは礼節性とか公共性といった，いわば“たてまえ”の部分には影響を及ぼさないのであろう。

以上のようなA, D両群の比較検討は，一戸建てＡＢ群と，高層ＣＤＥ群との比較よりもはるかに，顕著なパーソナリティ特性の差異となってあらわれた。そこで，まず基本的には高層か一戸建てかの相違が問題になり，ついで囲われた世界に住むか，それとも，ごちゃまぜのオープンの世界に住むか，が問題となるようである。

次に被験者の年齢，現住地への移住時期などと，パーソナリティとの関係をみてみよう。

一戸建群と高層群とのパーソナリティの差異は，社会性とか衝動性，活動性など，いわば“若さ”に象徴される特性のように思われる。そこで，ことによると，今まで述べてきたパーソナリティの差異は，居住構造に原因するものではなく，年齢による差異であることも考えられる。A地区に活動的特性が乏しいのも，一戸建群の混在地域は老齢，中高年人口が多いから，ともいえる。そこで，全地域を年齢構成別に２分して比較をすることにしよう。Table 4-Cを参照されたい。驚くべきことに，衝動性のみが有意な差で若年層がまさる以外，全特性にまったく差がない。本研究でとりあげた15のパーソナリティ特性は，すくなくとも20歳代と30歳代ていどの年齢差では，差異はみられず，発達的見地からの検討は，これ以上必要ないという結論を得た。

年齢の変数が，問題になるほどのものでないとなると，あと，考えられる変数としては，現住地へ移住してからの期間である。おそらくは，同一個所に長期間住まうことにより，パーソナリティ特性に，なんらかの変化が生ずることは，十分考えられる。しかし，今回の調査地域は Table 2に示したごとく，20年間程度の継続居住者は少ない。調査地域のほとんどが，いわゆる新開地

で，原野や山林が俄かに造成されて一団地を形成したものであれば，当然のことである。そこで新旧住民が混在し，さまざまな職業形態をもつ人が住まう一戸建群（A地区）について，昭和37年～46年の間に移住した群と，47年以降に移住してきた群の２群に分けて，そのパーソナリティ特性を比較してみることにした。Table 4-Bで示したごとく，A地区の主婦のうち，新規移住組として127名，旧移住組35名を比較してみた。有意差が認められたものは，社会的向性を始め，10～５％水準に危険率をおとせば，支配性，主観性も，新旧両群間に差があるといえる。しかし，A, D両群，すなわち，一戸建て群と高層群との比較（Table 3）と比べた場合，移住時期は必らずしもパーソナリティに顕著な差をもたらしたとはいえない。

しかしながら，旧住民の方が主観的であったり，新住民のほうが社会的外向に傾き，支配的であることは興味深い。もう一つ，適応性検査の結果に両群間の差がみられたことは注目してよい。居住構造や形態的差異からは，適応性に何一つ差異を生じなかったにもかかわらず，新旧移住者の比較では，計画性が新規移住者に顕著な傾向をみせ，創造性も高い。また，有意ではないが，共感性，機敏性ともに新規移住組の方が高い得点を示した。同一地区における居住期間が，ＹＧよりも適応性検査のほうに顕著に差異を生じた訳である。これを要するに，10年以上の長きにわたって居住する間に，次第にパーソナリティの特に周辺部分に変化を来たし，計画性（合理性），創造性，機敏性，共感性などを失ないつつあるのではないか，と思われる。こうした特性は，常識的には“若さ”と関係が深いように思われるが，さきにも考察したごとく，年齢の差はまったくない。（Table 4-C参照）そうであると，長期同一地域への居住は，環境への順応が行われて，やや消極化の傾向をみせ，行動特性が保守的になるのでないだろうか。政治的な保守的感覚も，案外，こうした環境への定着と順応が消極さをもたらし，そこから生まれる政治的風土を指すのではないだろうか。こうした点について，今後，高層住宅や新開地の住民が，20年ほど後に，どんな行動特性をもつようになるか，興味深いものがある。

以上述べてきたことを整理すると，パーソナリティ特性のうち環境の力で変りうるのは比較的表層の行動特性であり，基本的な特性は変化しにくい。したがって，自らが住まう住居の構造や形態を，われわれが選択するさい，すでに，もっている自己のパーソナリティが，住居を無意識的に選択させ，地理的，経済的要因などは，むしろ選択のさいの一種の“理屈づけ（rationalization）”として，挙げられる条件といえるのではないだろうか。

〔B〕 因子分析法による考察

「研究Ｉ-Ａ」において，述べてきたことは，ＹＧや適応性検査といった，既成のパーソナリティ検査を用い，最初から与えられた特性について各被験者群の特徴を，“検査得点の平均”と

(**Table 5**)　2種のパーソナリティ検査を因子分析した結果
——Varimax 法により回転した因子行列 (Factor Loadings)——

Variables \ Factors	I	II	III	IV	V	VI
1	0.135	0.390	−0.049	−0.016	−0.141	−0.094
2	0.228	0.399	0.007	−0.074	0.152	0.016
3	−0.182	−0.076	0.308	0.061	−0.154	0.196
4	0.164	0.095	−0.103	0.172	0.005	−0.137
5	0.106	0.214	0.011	−0.138	−0.110	−0.086
6	0.298	0.067	−0.118	0.074	−0.060	−0.118
7	−0.010	−0.106	−0.023	0.246	−0.088	0.043
8	0.015	0.011	−0.073	0.217	−0.037	0.145
9	0.190	0.255	0.078	−0.090	0.602	0.002
10	0.340	0.231	−0.048	−0.022	0.077	−0.030
11	0.033	0.254	0.169	−0.144	0.037	−0.082
12	0.099	0.087	0.167	0.356	0.054	0.040
13	0.619	−0.033	−0.003	0.042	0.056	−0.015
14	0.163	0.022	−0.100	0.090	0.118	−0.087
15	0.011	−0.081	−0.130	0.191	0.022	0.008
16	−0.042	−0.055	−0.366	0.172	−0.025	0.608
17	0.147	0.608	−0.048	−0.011	−0.002	−0.015
18	0.251	0.247	−0.090	−0.034	−0.025	−0.077
19	0.022	−0.010	0.315	−0.236	−0.131	−0.096
20	0.219	0.327	0.045	0.300	−0.023	−0.012
21	0.138	0.383	0.015	−0.021	0.106	−0.151
22	0.284	0.204	−0.113	0.038	0.425	−0.113
23	−0.085	−0.143	−0.046	0.195	−0.030	0.051
24	−0.066	−0.195	−0.017	0.196	−0.027	0.066
25	0.206	0.282	−0.026	0.131	0.167	−0.032
26	0.181	0.305	0.013	0.147	0.159	0.007
27	0.063	0.136	0.375	0.257	0.001	0.008
28	0.150	0.132	−0.158	0.429	0.099	−0.089
29	0.250	0.345	0.064	−0.069	0.044	−0.066
30	−0.009	0.044	0.011	0.543	0.056	−0.046
31	−0.015	−0.014	−0.037	0.229	−0.116	0.052
32	−0.033	−0.024	−0.088	0.214	0.098	0.085
33	0.162	0.326	0.038	−0.002	0.180	−0.048
34	0.190	0.255	−0.059	−0.150	0.116	0.040

Variables \ Factors	I	II	III	IV	V	VI
35	0.097	0.115	0.347	−0.240	−0.041	−0.057
36	−0.129	0.137	0.154	0.555	−0.075	0.087
37	0.728	−0.005	0.003	−0.101	0.030	−0.026
38	0.264	0.111	−0.002	0.220	0.149	−0.028
39	−0.010	−0.074	−0.161	0.281	0.009	0.199
40	−0.095	−0.047	−0.075	0.274	−0.013	0.007
41	0.208	0.553	−0.118	0.030	−0.046	−0.066
42	0.257	0.193	0.084	−0.133	0.673	0.017
43	−0.087	0.106	0.614	0.022	0.017	0.108
44	0.171	0.547	−0.017	0.138	−0.119	0.032
45	0.608	0.003	−0.041	0.018	0.067	0.019
46	0.172	0.055	−0.029	0.264	0.008	−0.018
47	−0.053	−0.050	−0.079	0.182	−0.073	0.115
48	0.051	−0.032	−0.307	0.145	−0.006	0.651
49	0.182	0.682	−0.047	0.032	−0.040	−0.027
50	0.292	0.591	0.084	−0.028	0.201	0.023
51	0.013	0.237	0.410	0.097	−0.007	0.063
52	0.197	0.527	−0.031	0.268	−0.044	−0.058
53	0.390	0.413	−0.082	−0.052	−0.039	−0.132
54	0.141	−0.030	−0.027	0.404	0.050	−0.004
55	−0.179	−0.092	−0.137	0.496	−0.002	0.094
56	0.006	0.007	−0.153	0.322	−0.071	0.041
57	0.212	0.573	−0.003	−0.114	−0.040	−0.077
58	0.349	0.413	−0.088	−0.077	0.092	−0.051
59	0.156	0.176	0.517	−0.260	0.010	−0.090
60	0.151	0.345	−0.003	0.231	−0.024	−0.046
61	0.360	0.365	0.070	−0.039	0.087	−0.078
62	0.015	−0.083	−0.116	0.279	−0.178	−0.033
63	−0.059	−0.007	−0.204	0.359	−0.032	−0.026
64	−0.268	−0.064	−0.179	0.229	−0.048	0.094
65	0.148	0.524	0.090	−0.013	0.001	0.012
66	0.122	0.407	0.145	−0.123	0.256	0.038
67	−0.228	0.126	0.136	−0.038	0.001	−0.037

(Table 5) つづき

Variables \ Factors	I	II	III	IV	V	VI
68	0.027	0.104	0.043	0.413	−0.099	−0.064
69	0.181	0.248	0.027	−0.215	−0.095	−0.024
70	0.205	0.203	−0.144	0.145	0.021	−0.161
71	−0.114	−0.121	−0.199	0.267	−0.054	0.243
72	−0.097	0.042	−0.201	0.219	0.035	0.049
73	0.367	0.246	−0.073	−0.049	0.296	0.002
74	0.230	0.327	0.036	−0.012	0.358	−0.039
75	0.022	0.140	0.688	0.060	0.024	0.026
76	0.229	0.417	0.279	0.065	−0.020	0.041
77	0.892	0.014	0.018	0.022	−0.045	0.036
78	0.085	0.049	−0.070	0.498	0.033	−0.114
79	−0.151	−0.233	−0.139	0.270	−0.088	0.035
80	0.009	−0.001	−0.158	0.276	−0.050	0.081
81	−0.011	−0.003	−0.015	−0.217	−0.068	−0.126
82	0.165	0.050	−0.198	−0.198	−0.097	−0.113
83	0.277	0.629	−0.036	0.023	0.071	0.022
84	0.280	0.193	−0.242	0.107	−0.005	−0.153
85	0.084	0.023	0.254	−0.227	0.022	0.148
86	0.275	0.075	−0.215	0.229	−0.025	−0.081
87	0.891	−0.020	−0.002	0.071	−0.038	0.001
88	0.029	−0.019	0.044	−0.302	−0.076	0.004
89	0.059	0.277	0.011	−0.145	−0.118	−0.050
90	0.214	0.563	0.001	−0.029	−0.075	0.082
91	0.062	−0.080	−0.027	−0.361	0.005	−0.059
92	0.247	0.102	−0.231	−0.198	0.169	−0.146
93	0.111	0.044	0.019	−0.319	0.026	0.046
94	0.658	0.017	0.111	−0.080	−0.049	0.060
95	0.252	−0.009	0.028	−0.171	−0.004	−0.027
96	0.016	−0.013	−0.010	−0.146	−0.051	−0.000
97	0.160	0.136	−0.131	−0.136	0.071	−0.008
98	0.064	−0.010	−0.020	−0.106	−0.024	−0.044
99	0.287	0.141	−0.221	−0.001	−0.042	−0.031
100	0.188	−0.024	−0.387	−0.228	0.030	−0.109

Variables \ Factors	I	II	III	IV	V	VI
101	0.795	−0.012	−0.017	−0.053	0.014	−0.046
102	−0.014	0.026	−0.002	−0.190	−0.069	0.067
103	0.065	0.058	−0.058	−0.175	−0.055	−0.061
104	−0.021	0.012	0.058	−0.363	−0.089	0.003
105	−0.013	−0.005	−0.164	−0.224	0.007	−0.120
106	0.205	0.040	−0.073	−0.221	0.111	−0.063
107	0.133	−0.030	−0.145	−0.222	0.012	−0.121
108	0.430	0.159	0.054	−0.164	0.094	−0.039
109	−0.018	0.013	−0.084	−0.095	0.013	−0.027
110	−0.020	−0.043	−0.095	−0.101	−0.242	−0.121
111	0.236	0.674	0.085	−0.136	−0.060	0.060
112	0.118	0.092	−0.294	−0.101	−0.072	−0.077
113	−0.024	0.086	−0.039	−0.249	−0.009	0.112
114	0.191	0.038	−0.103	−0.187	−0.083	−0.049
115	0.551	0.059	−0.146	0.030	0.110	−0.079
116	0.095	−0.002	0.038	−0.154	−0.048	0.009
117	0.217	0.049	−0.132	−0.083	−0.127	−0.041
118	0.129	0.214	−0.110	−0.036	−0.087	0.038
119	0.026	−0.027	−0.112	−0.461	0.026	−0.052
120	−0.104	0.026	0.142	−0.216	−0.127	0.003
121	0.198	0.114	0.092	−0.257	0.203	0.012
122	0.066	0.084	0.293	0.175	−0.042	0.021
123	0.181	0.119	−0.086	0.105	0.098	−0.075
124	−0.058	−0.108	−0.037	−0.026	−0.378	−0.034
125	0.037	0.110	0.127	−0.415	−0.006	0.019
126	0.202	−0.019	−0.183	−0.257	−0.029	−0.121
127	0.159	0.151	−0.312	0.191	0.058	−0.178
128	0.244	0.043	−0.097	−0.364	0.079	−0.012
129	0.357	0.163	0.058	−0.127	0.075	−0.052
130	−0.081	0.049	0.141	0.155	−0.061	0.006
Contributions	8.046	7.280	3.743	5.957	2.239	1.555

(**Table 6**) ＹＧ検査と適応性検査の因子分析結果
——抽出因子と項目の負荷量——

第Ⅰ因子：敏腕・活動性	因子負荷量
*77. 動作がきびきびしている	.892
101. 物事を，てきぱきと処理する	.795
37. てきぱきと物事をかたずける	.728
**94. のろまなほうである(−)	.658
13. 短い時間に沢山の仕事をする自信がある	.619
45. 仕事は人よりずっと速い方である	.608
115. 頭の回転が早い	.551
108. 人におくれをとることが多い(−)	.430
53. いきいきしている	.390
73. 人中に出てもまごつかない	.367
第Ⅱ因子：社交性（衝動性と押しつけがましさ？）	
49. 誰とでもよく話す	.682
111. 友だちをつくりにくい(−)	.684
17. こちらから進んで友達を作ることが少ない(−)	.608
50. 引込みじあんである(−)	.591
57. 新しい友達はなかなかできない(−)	.574
90. 話しやすい人だ，といわれる	.563
41. 人と広くつきあうのが好きである	.553
44. 人といっしょに，はしゃぐことが多い	.547
52. 口数が多い方である	.527
65. 無口である(−)	.524
第Ⅲ因子：思考性	
75. 深く物事を考える傾向がある	.688
43. 何んでもよく考えてみないと気がすまない	.614
59. たびたび考えこむくせがある	.517
51. 用心深いたちである	.410
100. 目標を立てて努力する(−)	−.387
27. 実行する前に考えなおしてみることが多い	.375
16. 心配でねむれぬことがたびたびある(−)	−.366
第Ⅳ因子：衝動・攻撃性	
36. よく考えずに行動してしまうことが多い	.555
30. 衝動的である	.543
78. 退屈な時は何か強い刺激を求める	.498
55. 不満が多い	.496
119. 何でも思いつきでする(−)	−.461
28. いつも何か刺激を求める	.429
125. 人のすることによく腹がたつ(−)	−.415
54. 気が短い	.404
128. 困るとすぐ投げだす(−)	−.364
104. 人を怒らせることがある	−.363
第Ⅴ因子：図々しさ・ものおじしない	
42. 目上の人の前に出るとかたくなる(−)	.673
9. 知らぬ人と話すときはかたくなる(−)	.602
22. 目上の人とも遠慮なく議論することがある	.425
124. 目上の人にも特に気は使わない(−)	−.378
74. 人前で話すのは気がひける(−)	.358

* 質問項目の左側の数字は，Table 1に挙げたパーソナリティテストの項目番号と一致している。また，どの項目がどんな特性を示すものかについては，同じく Table 1の脚注※を参照のこと。なお1～80番はＹＧ，81～129番は適応性検査のアイテムである。

** 質問のあとに(−)を付した項目は，質問にさいして「いいえ」と答えた場合，得点するような項目である。

して捉えてきたものであった。そこで今度は，別の角度から結果の裏付けをする意味で，また，2種類の検査結果を総合的に考察するうえからも，若干の因子論的考察をすすめていく。

Table 1 などで挙げてきたＹＧ検査など，130アイテムを変数として，因子分析を行った。バリマックス法を用いて回転後，一応，第5因子までを抽出した。回転した因子行列については Table 5 に示した通りである。そのうち，因子負荷量の大きいものを別掲したものが，Table 6 である。

まず，第Ⅰ因子で明確なことは，負荷量の大きい項目すべてが，“きびきび”，“てきぱき”といった行動の素速さを示している。機敏さ，エネルギッシュ，若さなどを象徴する因子らしい。ＹＧからは６個，適応性検査からは４個，計10個で占められているが，10番目の.367の負荷量をもつ項目で始めて，社会的外向を示すものが入ってきている。第Ⅰ因子を「敏腕・活動性」の因子と呼ぼう。

第Ⅱ因子は，ＹＧの社会的向性の項目が半数を占めた。そこで当然，社交性といった因子と思われるが，衝動性のアイテムが.5以上の大きい負荷量で２個（No. 44,52）入っており，支配性を示すアイテム（No. 50）もみられることから，“社交性”という傾向の本質には，どこか衝動的な，あるいは積極的な押しつけがましさをも含んでいるともいえよう。しかし，ここでは第Ⅱ因子を「社交性」の因子と命名しておく。

第Ⅲ因子は，７個のうち負荷量の大きい上位４個までが思考性を表わすもので，そのまま，「思考性」の因子と考えてよいと思う。

第Ⅳ因子は，さまざまな特性のアイテムが入りこんでいる。衝動性と攻撃性のアイテムが多数を占め，これに共感性の欠除も若干ふくんでいる。アイテムの具体的な性質も併せ考えると，第Ⅳ因子は，「衝動・攻撃性」とみてよいだろう。

第Ⅴ因子は支配性やら社会的外向などのアイテムが混入し，はっきりした特徴をつかみにくい。「堅さ―融通性」，とも思えるが，権威をこわがらぬ，とか遠慮しない，という点で一つの傾向を把握することもできそうで，ここでは「図々しさ，ものおじしない」因子としておこう。しかし，それは長所として捉えるならば，社会的な「意識の高さ」を示す特性なのではなかろうか。

さて，こうして抽出した５個の因子について，典型的な住居の構造・形態の差異を示したＡ，Ｄ地区について，その因子を構成する各アイテムを検討し，まとめてみたものが Table 7 である。この表を一べつして分るように，居住構造ないしは形態の差異と，居住者（主婦）のパーソナリティとの関係は，因子論的考察からも確認，裏付けされた，といってよいだろう。すなわち，高層群は一戸建て群よりも，活動的で敏腕，社交的で衝動性やや高く，ものおじしない意識

(Table 7)　住居構造・形態と，抽出因子とのおおよその対応

因子別 ＼ 住居の構造別	Ⅰ敏腕・活動性	Ⅱ社交性（衝動性と押しつけがましさ？）	Ⅲ思考性	Ⅳ衝動・攻撃性	Ⅴ図々しさ，ものおじしない（意識の高さ？）
Ａ（一戸建住居）	－	－	±	－	－
Ｄ（純高層集合団地）	＋	＋	±	＋	＋

(**Table 8**) 顕在性不安検査 (MAS) Spence, J. T. による

1.	心臓の鼓動が気にかかったり，息切がするようなことが，しばしばあります。	はい・いいえ	26. まったく自信のないことが多いようです。 はい・いいえ
2.	しじゅう，なにかたべたいような気がします。	はい・いいえ	27. なにかしようとするとき，手や身体が震えることがあります。 はい・いいえ
3.	ひとつの仕事に熱中しかねます。	はい・いいえ	28. 手足が冷えるようなことがしばしばあります。 はい・いいえ
4.	気が散ってひとつのことに熱中できません。	はい・いいえ	29. しばしば頭痛がします。 はい・いいえ
5.	しばしば耐えられないような困難なことが山積しているような気がします。	はい・いいえ	30. じっとして待つことは，いらいらして神経にさわります。 はい・いいえ
6.	なにかにつけてすぐ当惑することがあります。	はい・いいえ	31. 非常に筋を通したがります。 はい・いいえ
7.	他の人より敏感だと思います。	はい・いいえ	32. しばしば悪夢に襲われることがあります。 はい・いいえ
8.	悩みがわいてきて眠れないことがあります。	はい・いいえ	33. 絶えずなにかについて，または，だれかについて気がかりになります。 はい・いいえ
9.	危機や困難に出合うと尻込みします。	はい・いいえ	34. ときどき眠れないほど興奮することがあります。 はい・いいえ
10.	他の人より神経質だと思います。	はい・いいえ	35. 赤面することをしじゅう恐れます。 はい・いいえ
11.	ときどき心が乱れるように感じます。	はい・いいえ	36. 仕事や勉強のことについて，くよくよします。 はい・いいえ
12.	今は危険や恐怖を加えないことがはっきり解っているものでも，子供の頃には恐れたことがしばしばありました。	はい・いいえ	37. 取越苦労をします。 はい・いいえ
13.	日常生活ではしばしば過労や緊張を感じます。	はい・いいえ	38. ときどき自分は善良でないと思います。 はい・いいえ
14.	人に語れないような秘密について，しばしば夢を見ることがあります。	はい・いいえ	39. 便秘をして困るようなことが，しばしばあります。 はい・いいえ
15.	1カ月に1度程度下痢をすることがあります。	はい・いいえ	40. 胃が痛むことが，しばしばあります。 はい・いいえ
16.	他の人のように愉快でありたいと思います。	はい・いいえ	41. 物事を固苦しく考えます。 はい・いいえ
17.	ときどき自分は役に立たない人間だと思います。	はい・いいえ	42. たいていの場合，赤面します。 はい・いいえ
18.	大抵不愉快，不満足なときを過しています。	はい・いいえ	43. 人前で顔が赤くなるようなことがしばしばあります。 はい・いいえ
19.	寒い日でも汗ばむことが多い方です。	はい・いいえ	44. 仕事や勉強をするとき，非常に緊張します。 はい・いいえ
20.	困ったとき汗が出て困ることがあります。	はい・いいえ	45. 普通以上に自己反省の傾向があります。 はい・いいえ
21.	取り乱して落ち着けないことがあります。	はい・いいえ	46. 実際にはあまり問題でないことについて，なんの理由もないのに悩みます。 はい・いいえ
22.	ちょっとしたことでも疲れやすいです。	はい・いいえ	47. 他の人よりも物事を恐れる方です。 はい・いいえ
23.	安眠できないで困ることがあります。	はい・いいえ	48. ときどきじっとしていられないほど落ち着かないことがあります。 はい・いいえ
24.	自信にかけたところがあります。	はい・いいえ	49. 乗物に酔ったり，吐気がして困ることがしばしばあります。 はい・いいえ
25.	すぐ大声でわめきたてることがあります。	はい・いいえ	50. なにかしら悩むことがあります。 はい・いいえ

の高さを示している。

ところで，YG検査などの得点結果からも，また因子分析の結果からも，高層群よりも一戸建て群のほうが社会性に乏しく，内向的であった。何か，打ちとけない堅さも感じさせる。しかし，これをもって一戸建て群の主婦たちが，近隣との交際で不満が多いと考えるのは誤りである。松井，詫摩らの研究[文献5]では，近所づきあいには一戸建て群の主婦がもっとも満足しており，5点法の満足度の自己評価では，高層群の3.16（ふつう）に対し，一戸建て群は，平均3.87（かなりの満足）を示している，という。おそらく一戸建群は，地味な（内向的な）交際を好みとしているのであろう。

これまで，指摘，考察してきたことから，住居の選択にさいして，経済的，社会的，地理的要因と並んで，住居者（主婦）の基本的なパーソナリティが大きく影響している，という仮説はかなり正しいとみてよいのではないだろうか。

4. 〔研究Ⅱ-A〕 住居構造・形態と居住者の不安度(MAS)との関係

a．手　続

研究Ⅱでは，パーソナリティの基本的な情緒的側面の一つとして不安度と，住居構造・形態との関係を検討してみよう。

たんに不安といっても，多くの面や内容をもち，例えば，正常不安に対する病的不安といった区別もある。しかし本研究では，正常者の集団の，しかも一般的な不安を探るわけであるから，当然，個人的な潜在不安ではなく，表層に顕在する不安を研究の対象とするものである。顕在不安の測定には，その高い妥当性が多くの文献[文献6注5]で認められているスペンスの不安尺度（MAS）を使うことにした。（Table 8 参照）また，ここで用いた被験者は，研究Ⅰと同様，埼玉県西部のさまざまな住居構造・形態をもった地区の主婦を対象に行った。調査時期は研究Ⅰと異なり1979年11～12月であったが，今回は研究Ⅰの西坂戸地区に代って富士見ハイツ地区を選んだ。両地区とも，環境的にも住民の経済的，社会的背景も近似している。なお，サンプル数については Table 9を，また，その地域の特徴や，住民（主婦）の大よその年齢構成については，Table 2 および10を参照されたい。

(Table 9) 不安検査の被験者

地　　域	サンプル数
A川越市下広谷	102
B〃富士見ハイツ	* 173
C坂戸市北坂戸	100
D　〃　東坂戸	99
E　〃　若葉	36
合　　計	510

* 富士見ハイツは，YG検査の対象のB地区西坂戸と類似した一戸建て団地。

b．結果と考察

(**Table 10**) 住居構造・形態と住民の不安度(MAS)との関係

調査地域	地域の特性	調査票配布数	内有効N	M	SD
A川越市下広谷	一戸建て，新旧居住者の混在	102	102	12.02	7.5
B〃富士見ハイツ	一戸建て新開地の団地	195	173	13.43	8.1
C坂戸市北坂戸	高層集合団地，一部商店街混在	106	100	12.64	7.7
D 〃 東坂戸	純高層集合団地	105	99	13.51	7.9
E 〃 若葉	Cに同じ	40	36	13.17	8.2
計または平均		548	510	12.99	
A＋B	一戸建て住居者	297	275	12.91	8.0
D＋E	高層住居者	145	135	13.41	8.3
CDE地域の1～4階居住者	高層居住者[注6]	－	180	13.01	8.1
同5～11階居住者		－	44	13.14	8.3

それでは，MASの結果をみてみよう。Table 10に示したごとく，何れの地区の間にも，さしたる差異は認められず，僅かに一戸建て混在のA地区と，純高層群のDおよび一戸建ての新開地で団地の形態をみせるB地区との間に，10～20%水準で差らしきものがみられたに過ぎない。僅かな不安度の差ではあるが，これは「研究I」で明らかになったようなパーソナリティ特性の差異から考えても，一応うなずける結果といえよう。すなわち，高層群よりも一戸建群が，YGなどでは比較的落ちついた特徴を見せたことから，やや不安度が低い，という結果は受け入れられる。しかし，同じ一戸建て群であっても，B地区のような多くの点で画一的形態をとる団地地区では不安度が高い結果が出たことは注目されよう。不安度については，高層か一戸建てか，という要因よりも，むしろ画一的な団地形態か，それとも“多種多様な人種”がごちゃごちゃと混ざりあった形態かということのほうが関係があるようで，後者の方に不安度が低かったことは興味深い。しかし，ここで僅かな不安度の差異を論拠に詳細な分析や考察をすすめることは避けねばなるまい。そこで次に，50アイテムからなるMASの因子分析を行い，その結果，因子別に住居の構造などとの関連を見出してみよう。

〔B〕 因子分析法による考察

Table 9に示した510名の主婦に実施したMASの因子分析を行った。その結果，明確な因子を残差法によって計算した結果，第Ⅳ因子まで得ることが出来た。Table 11に負荷量の大きいものから順に各変数（ここでは不安尺度のアイテム）を列挙したが，負荷量は記載を省略する。

さて，第I因子は，アイテムの内容から推測して「神経質的な傾向」を表わす因子のようである。第II因子は，全体的にいって反省心や取り越し苦労を示す内容が多く，ここに含まれるアイテムには胃が痛んだり，不眠に悩んだりするものが多い。これを「苦労性的傾向」の因子として

(**Table 11**) 住居構造（一戸建と純高層団地）の相違と因子分析による不安構成因子との関係

第Ⅰ因子　神経質的傾向			
アイテム*	A(一戸建)	D(純高層)	差
48	20.5%	23.2%	0
26	29.9	22.7	−
11	28.4	27.2	0
9	41.2	35.4	−
33	15.7	28.2	＋
47	21.0	22.2	0
36	16.7	16.7	0
46	22.6	32.8	＋
44	28.6	18.2	−−
27	11.8	12.1	0
6	19.6	20.2	0
第Ⅱ因子　苦労性的傾向			
46	22.6%	32.8%	＋
40	26.4	21.2	−
39	28.4	29.8	0
8	16.7	27.2	＋
45	38.2	40.9	＋
23	11.8	29.3	＋
10	34.3	37.9	＋
20	15.7	23.2	＋
37	55.4	46.5	−
34	7.8	17.7	＋

第Ⅲ因子　完全志向，緊張傾向			
アイテム	A(一戸建)	D(純高層)	差
42	12.2%	11.6%	0
43	16.2	18.7	0
41	36.3	43.4	＋
27	11.8	12.1	0
44	28.9	18.2	−−
19	6.9	16.1	＋
10	34.3	37.9	0
37	55.4	46.5	−−
第Ⅵ因子　心身症，自律神経失調的傾向			
29	26.5%	30.8%	＋
28	50.0	37.3	−−
1	15.2	18.2	＋
40	26.4	21.2	−
13	44.6	47.0	＋
49	18.6	18.7	0
43	16.2	18.7	＋
22	31.4	35.9	＋

* 各アイテムの番号は，Table 8 に示したMASのアイテム番号と一致している

みた。第Ⅲ因子は，赤面，まじめすぎる，何かしようとすると手や身体が震える，などといった，完全志向を表わす内容である。ここではいちおう，「完全志向，緊張傾向」の因子とするが，完全志向という考え方も，不安の病理からすると，うなずける表現である。第Ⅳ因子は，頭痛，冷え症，息切れ，胃痛，疲労感，乗物酔い，吐き気など，明らかに心身症や自律神経失調の傾向を示す因子で，不安が神経質，苦労性，完全志向と緊張，心身症などの因子で構成されていることは注目されよう。

さて，こうして抽出した4因子について，あらためて典型的な一戸建群と高層群のＡＤ地区間で比較してみよう。Table 11 に示したように，各アイテムに対し，ＡＤ地区の被験者の何%のものが「はい」と答えたかをまとめてみた。さらに χ^2 検定で一応の差あり，と認められた項目について，Ｄ地区を基準にして，５%レベル程度の有意差を＋＋（または−−）で，有意差とはいえないものの一応，注目さるべきものには＋（または−）を，差のないものは０を付した。

結果をみてみよう。第Ⅰ因子については，全体的にみてＡＤ両群に差はない。アイテム別にみた場合，Ｄ地区（高層群）は“気がかりなことが多く”，一戸建群のＡ地区のほうか“きまじめ”で

“劣等感”が強いようである。第Ⅱ因子については，D地区がA地区よりも顕著に高い値いを示し，苦労性の傾向をはっきりみることが出来た。アイテムも“取り越し苦労”や“不眠”“安眠しにくい”などが多く選ばれている。第Ⅲ因子では，しいていえばA地区に高い傾向を認めるが，これは，A地区のＹＧなどが，“きまじめ”な特徴をみせたことからもうなずける結果である。第Ⅳ因子については，D地区のほうがA地区よりも，いくぶん，自律神経系の失調を思わせる。とくに頭痛，疲労しやすい，息切れの反応が多くみられた。この点については，山本らの研究[文献7]でも，高層群が76項目の自覚的身体精神的病訴のうち，高い頻度で選ばれたものが首すじや肩のこり，疲れやすさ，冷え症などであったという。また，高層群の30％の人が拘束感や圧迫感を訴えていて，高層群に精神身体的異常感をもつものが多いことを示したという。なお，本研究では，なぜか冷え症のアイテムだけは，A地区（一戸建）に極めて多かった。

ところで，ＹＧ検査がパーソナリティのかなり基本的部分を捉えるのに対し，ＭＡＳは，パーソナリティの流動的な情緒的側面を捉えるといってよかろう。表層的な適応性検査の結果が，移住時期の新旧と関係があったのと同様，顕在性不安の高低もまた，居住してから後の居住形態がもたらした結果である，といってよいのではないだろうか。

どうやら，集合団地は，その閉鎖性，画一性が不安度をやや促進する結果となり，とくに取越し苦労や自律神経系の失調を招くのではないか，と考えられる。

5. 結論（要約）

研究の目的の項で明らかにしたごとく，第１として住居の構造形態の差異と，居住者のパーソナリティ特性との間には何かしらの関係が認められるであろうと予測した。それは経済的，地理的，社会的要因を時にはこえて，今日では新たに居住構造や形態が，パーソナリティの形成に強く関与する，という仮説であった。

第２として，パーソナリティ特性の差異が，仮に認められた場合，そのうちのある部分は，すでにその住居を選択する以前からもっていた特性であったろうし，住居選択にあたって，なかば無意識的な役割を演じたであろう，とも考えた。そのさい，一体，パーソナリティのどの部分が選択にあたって役割を果したか，どどの部分が，今度は居住開始後，その居住構造ゆえにパーソナリティの形成に影響してきたか，などを知ろうとする意図をもった。

さらに第３として，不安度についても，同様の検討を試みようとした。

以上の３点について，今まで考察してきたことから，結論だけを述べよう。

(1) 住居の構造や形態の相違によって，そこの住民（主婦）のＹＧ，適応性，不安度などに，相当の差異が認められた。これを要約するに，非団地形態の一戸建て群は，典型的な高層群より

も社会性が内向的で，支配性，衝動性も弱く，図々しさの少ない傾向を示し，総じて高層群よりも活動性の低さを示した。この逆の傾向が高層群の特徴であるとすれば，表現の仕方では，それは“やや短所の多い人たち”といった印象を与える。しかし，そうではない。高層団地群は，明るく，ものおじせず，決断力に富み，他人に共感を覚え，総じて活発な人たち，といってよい。何れにせよ，居住構造形態と，パーソナリティ特性との間に関係がある，とした仮説は，一応正しいように思える。

(2) こうしたパーソナリティの差異は，表層的な適応性検査には，ほとんど全くといってよいほどみられず，基本的かつ固定的に近いＹＧ検査のほうに顕著にあらわれた。これは，住居の構造や形態が即座にパーソナリティを変化させたのではなく，すでに自らの住居を選択するさいに，好みとして，あるいは，様々な理由づけを与えながら，無意識的動機として役割を演じたものである，と考えたい。筆者は，この点について，さらに移住時期の新旧と，パーソナリティ特性との関係を捉えようと試みた。その結果，今度は，ＹＧよりも表層的行動特性を検査する適応性検のほうに顕著な差異がみられた。同一個所に長期間居住することによって，次第に計画性，創造性を失ない，他人への共感性も機敏さも，幾分低下するなど，行動レベルに変化を生ずることが，ほぼ明らかになった。

しかし，高層団地居住者で，ひきつづき数十年居住している者は，いまだないために，今回は調査の対象になり得なかった。この点は将来への残された課題でもある。

(3) 不安度は，住居構造や形態との間に明確な関係が見出せなかった。しかし不安尺度の因子分析を行ったのち，因子別に検討を加えてみた時，若干の差がみられた。すなわち，高層群は一戸建て群よりも有意に苦労性的であり，自律神経失調の傾向をはっきりみせた。また，若干，自信も強いようである。不安度はＹＧほど固定的な情動ではなく，かなり流動的に変化しやすい。その意味では，不安は“だれでもが所有している，しかし基本的な精神症状”といえよう。今回の研究で，高層団地や，一戸建て新開地の団地の居住者が，やや強い不安をもっていたのも，その社会心理的な風土性がもたらした，一般的な症状，といってよいだろう。

(4) 文献にもみられるように，一戸建てであろうと，高層団地であろうと，居住者は自らの住居の方がよい，と思っているようである。例えば，団地のイメージについても，団地に住む人たちは，そこを，よりよく評価し，一戸建て居住者は，団地をあまり好ましく評価していない。加藤らの研究[文献7]では，冷たい感じ，ゴミゴミしている，味気ないなどの点で両者の間には評価の差があるというし，別段，高層団地居住者が転居をより多く希望する訳でもない。加藤らによると，一戸建て住民の71％が転居を希望していないのと同様に，分譲高層群の住民もまた67％と同率に近い人たちが転居を希望していないという。両群とも自らの住居を住みやすい，と思っているのである。

かくて住居の選択は，客観的な機能性とか経済性といった問題だけではなく，住まう人のパー

ソナリティによって選んでしまった，という考え方が成り立つようである。しかし高層団地群などに精神身体的自覚症状が多かったという事実を考えるとき，高層団地居住者への精神衛生的施策が望まれる。しかしそれはともかく，今や新しい，パーソナリティのミクロ的な風土性が誕生しつつあることだけは，確かである。

付記：

1. 本研究をまとめるにあたり，データのコンピュータによる整理と因子分析については，加藤武信助教授と，計算センターの石井宏氏のお手をわずらわした。特に加藤助教授からは，多くのご教示を受けた。ここに深湛なる謝意を表したい。
2. 調査の実施，ならびに調査票の集計などについて，面倒な仕事を引き受けて下さった方々の氏名を次に記して感謝の意を表したい。

   斉藤美智子，山田一恵，矢野弘子，村松房子の4氏ほかの方々。
3. MASの因子分析については，中山隆教授ゼミの学生，竹下浩君ほか4名の手によるデータを使用させていただいた。同君らの労を多としたい。
4. 被験者への調査票配付にあたって，鶴ケ島幼稚園，西坂戸幼稚園のご協力を得た。ここにお礼を申し述べたい。

文献ならびに注

文献1 駒崎勉，岡村一成　ベッドタウンの居住条件と住民の生活意識に関する研究〔Ⅰ，Ⅱ〕日本心理学会第42回大会論文集 pp. 1276-1279，1978年9月

2 駒崎勉，夫の職業形態と妻のパーソナリティに関する研究　日本教育心理学会第21回総会論文集 pp. 656-657，1979年10月

3 田中国夫ほか　職務適応性診断検査　1973年5月版

4 駒崎勉，岡村一成　住居構造と居住者のパーソナリティに関する調査研究〔Ⅰ，Ⅱ〕日本心理学会第43回大会論文集 pp. 732-733，1979年9月

5 松井豊，詫摩武俊ほか　集合住宅住民の心理特性に関する研究〔Ⅳ〕　日本心理学会第44回大会論文集 p. 713，1980年8月

6 Ohmura, M., & Sawa, H. Taylor's Anxiety Scale in Japan. psychologia, 1. pp. 123～126, 1957

7 山本和郎ほか　住民と精神健康に関する研究　日本心理学会第44回大会論文集 p. 714，1980年8月

8 加藤義明，詫摩武俊ほか　上掲5の〔Ⅱ〕，p. 711，1980年8月

注1 平祖興の国別人情，風俗を表わした人国記2巻（1700）

2 本稿でいう「住居の構造」とは，高層住宅か一戸建て住宅か，といった各戸の住居の「構築上の種別」を示し，「住居の形態」という場合は，画一的な様相を示す団地とか，構造上さまざまな種類の住宅や，あるいは，職業形態の多様な人々の住む，混在住宅地といった，やや広域に眺めた「環境的種別」を示すこととする。

3 この部分については，その一部を文献4において，すでに要旨のみを発表している。

4 住居の階層は11階建て以上を高層といい，5階建て以上11階未満を中層住居，などと呼ぶことが一般

的である。しかし，社会心理学的には，居住者や，その近隣のものが，いかに認知しているかが，より重要であり，特に，今回の調査地域のように，付近にほとんど，高層建築物のない個所では，原野に俄かに出来た5階建て集合住居であっても，それは高層ととられて不思議はない。ここでは，5階建てから11階建て住居までを，すべて高層と呼んで，あえて細部の区別をしなかった。

5　多くの文献がＭＡＳの妥当性を実証するような研究，応用結果などを紹介している。文献6の大村らの論文には，ＭＡＳのこれらの問題を総括して，紹介している。

6　高層住宅のなかでも上層階に住むものと，下層階に住むものとの間には，さまざまな点で差異があるように推測される。しかし不安度の得点では全く差が認められなかった。このことは，自分が何階に住んでいようと，“高層ビルの中の一員”である，という意識には変りがないことを暗に示しているようで興味深い。この辺にも居住者の主観性（自分の住居をいかにとらえるか）が問題であり，注4にも述べたように，客観的な高層か中層かといった基準は，あまり意味がないようである。